

自分史で終活を充実

自分史「国際金融人・岡部陽二の軌跡~好奇心に生きる」

岡部陽二

1、自分史刊行の経緯

- ① 藤原作弥氏(1937 年生まれ、元時事通信記者・論説委員、日銀副総裁)の当倶楽部でのご講演「昭和時代に生きる」、同氏の著書「満洲、少国民の戦記(1988 年、新潮文庫)」から、終戦翌年の 1946 年一年間を共に安東で抑留生活を体験したことを知り「一満州難民の体験記」を執筆、当倶楽部の「会報」に投稿。
- ② 娘に初耳と指摘され反省。終活の一環として一念発起、満州抑留時だけではなく、生涯を通しての自分史を企画。
- ③ 自分史は自分だけでは書けないと認識、客観性の担保が問題。
- ④ 朝日新聞に当たったが、独善的でデジタル出版に消極的と分かり、日経出版に依頼。
- ⑤ 日経紙の「私の履歴書」で培われた編集力は流石。
- ⑥ 総ページ数は「私の履歴書」の 2 倍強、章ごとの字数に制約なし。
- ⑦ 印刷本は少数部に留め、基本的にはアマゾン Kindle 版の電子書籍刊行とネットの「岡部陽二のホームページ」での発信。
- ⑧ 毎日新聞夕刊のコラム「人・模・様」に登場。
- ⑨ 東証ペンクラブより「ペン文化賞」授賞

2、 電子書籍・ネット公開のメリット

- ① 読者層の広がり
- ② 絶版とならない
- ③ 修正、増補が自由
- ④ カストマー・レビューが多岐、多彩(8 件を添付)

1、「国際金融人・岡部陽二の軌跡」アマゾン Kindle 版への書評

住友銀行マンの面目躍如たる自伝 雨露歩(元朝日新聞)、2018 年 10 月 23 日

私は金融を担当したことのある新聞の経済記者である。いまではるか昔のことになったが、本書の著者が住友銀行の国際金融部門の開拓者的な活躍をされた時代のなかで、ニクソンショックのあった 1971 年ころには日銀記者クラブを受け持っていた。そのころ、政府・日銀は、固定為替制度の崩壊がおこるなどとはおくびにも出さない。無知な我々はあの 8 月 15 日の衝撃的な金・ドル交換停止のニクソン声明の意味すらまったくわからず、右往左往したことをいまでも夢魔のように思い出す。当時、国際金融の問題についての取材先といえば、まず外国為替専門銀行だった東京銀行と、この分野では最も知見の豊富だった三井銀行であった。大都市銀行の三菱、住友、富士銀行には、この点で取材に応えられるここぞという人材があまり見当たらなかった。

そういう時代をまたいで、住友銀行の国際金融部門の先導となって戦い、働いたのが著者である。むろん私は当時、この人を知る由もなかったが、このころから国際金融の最前線で大活躍された状況を、驚くほど正確に事実を踏まえて書かれた本書を通読して、いかに国際金融後進国のわが国の銀行が世界のマーケットに食い込んでいくかをまざまざと見せつけられる思いがする。大蔵省(財務省)日銀のきびしい規制や、企業などの無知のなかで、それはどれほど苦労と苦痛の多いことだったろう。著者は自分のした仕事を客観的に描く禁欲的な姿勢を一貫して守っており、感情的な表現は抑制されているが、当時の取材記者として、その努力、闘志のすごさを行間に読む思いがする。

それにつれてもうひとつの感想は、これは一人の典型的な「住友銀行マン」の姿を自ずと表現しているということである。戦後の住友銀行の性格を確立したのは堀田庄三頭取ということは常識になっているが、長くこの銀行を率いた堀田氏の統治精神はあらゆる意味で「厳しい」ということだったと思う。怠慢などはまったく許されない空気が、取材に当たっても痛感されたものだ。本書の著者は自らそういうことを表白されてはいないが、この猛烈な仕事ぶりは住友銀行マンの模範だったに違いない。

本書には、著者の幅の広い人生行路、家族愛、趣味などもゆたかに書き込まれているが、そういう生き方を展開できた著者の強靱さには、感嘆してしまう。日本のある時代のバンカーを知るといううえでも、一読をお勧めしたい。

多彩な人脈と好奇心が人生を彩る 「私の履歴書」 研究家、2018 年 9 月 25 日

表題にある「軌跡」と副題の「好奇心に生きる」の看板どおり、1970 年代以降の金融界における国際化・証券業務への多角化の先駆者として邦銀の先鞭をつけて新しい業務を次々に切り開いていった数多くのイノベーションが闊達な筆致で綴られている。

この本は日本経済出版のプロの編集者とのインタビューを通じて完成されたもので、文章は流暢簡明で読みやすい。

著者のダイナミックな仕事ぶりはまさに国際バンカーとして、所々に、英国のチャールズ皇太子を初め各国の名士の方々との交遊が出てくる。この人脈が著者の人生に彩りを添えたのは容易に想像できる。

加えて、誕生から今日に至るまでのビジネス生活は勿論、特異な鉱物採集、夢の洞窟探検などの大自然の旅、そして欧米生活でのオペラやミュージカルなど多彩なエピソードがちりばめられた内容にも引き込まれる。

先見の明とゆるぎない信念を持ってサラリーマン人生の運命をさえ変えてしまい、まさに人生を二倍に生きてきた迫力に圧倒される。

「運も実力の内」とよく言われるが、常にアンテナを張り巡らせていないことには運も付いてこないことが、この本から実感できる。筆者のように人生で遭遇するあらゆる場面を素敵なものに変え、またとない貴重な出逢いと感じることが出来れば、この世に争いは起こらず、皆が元気に働けるのではなかろうか。

著者の国際金融人としての多彩な経験や広島国際大学教授としての医療や教育論など、多方面の活躍には目を見張るものがある。とりわけ「好奇心の塊」のような著者の生きざまはサラリーマン人生を淡々と過ごしている若者には大いに参考になろう。

また、日経「私の履歴書」の登場人物も、その紙面に先祖や両親の業績を丁寧に著述している人も多い。著者のように父親の顕彰をきちんと書いておくのも子供たちへの遺産でもあり、自分史の価値を高めるものとして評価できる。

好奇心に生きる~何事にも決して諦めないしぶとさ

ヤナギネコ、 2018年10月7日

個人の曖昧な記憶を自伝風にまとめあげたものは多々あるが、この「国際金融人・岡部陽二の軌跡」は、それらとは一線を画するものである。まさに明快そのもの、何やかやを虱潰しに調べ上げて、著者個人にとどまらず、私たち日本人の来し方を様々に照らし出し、考えさせられる内容になっている。一大傑作である。

さっき、述べた「虱潰し」という言葉は、物事を片っ端からすべてにわたって片付けていくことを意味する言葉であるが、今や虱の絶滅とともに死語になっているのかも知れない。

著者によって書かれた虱潰しは文字通り、不衛生な着た切りシャツに繁殖する虱を、徹底的に、両手の爪先で潰していったという事実を書いている。そういう難民生活を強いられた十一歳の日課にあって、満州の小京都とも言われる、桜や柳のそよぐ風景を忘れることはなかった。

決して諦めない姿勢は、まさにこの虱に培われたものでないだろうか。同時に又、一大難儀を、次々と踏破し、男の出世のトップを走りながらも、それらにまつわる些事もまた打ち捨てることなく、何よりはらからを慈しまれることなど、こころの風景の原点をここに見るような気がする。

もっとも強い男は、もっとも優しいということであろう。

ところで、経済にも政治にも疎い私ではあるが、昔の銀行という立ち位置は現代のそれとは大きく異なって、庶民からみれば神さま仏さまという存在であったように覚えている。

そんな中にあって、「寝食を忘れる」というような生易しい言葉の響きには追いつかぬほどの現実を体験されたことであろう。

飽くなき好奇心は、これから先どこまで発展されるのであろうか。

今、読み了へて、筆者もまたおちおちしてられない、ちょっと頑張ってみようかと、それなりの勇気をいただいている。

さまざまな苦難を乗り越え、こんなにも熱く色濃く生きて来られた岡部陽二氏の栄光の軌跡を読了し、感動のあまりしばらくは茫然といたしました。

トンネルの灼熱地獄無蓋貨車
疎開貨車降りて捕虜たり敗戦日

ご母堂のこの二句からも察せられる通り、終戦間際に侵攻してきたソ連からの満州逃避行の序章は息つく間もなく読み継ぎました。

その過酷な日々は当時十一歳の岡部少年にして、誰にも頼れない、何でも自分でやるという意識が育ったと述懐しておられます。思えば岡部氏の原点はここにあったのかもしれません。

ロスアンゼルスをふり出しに国際金融分野に総力を発揮された長き歲月、激務の中を越えて来られた、その体力、精神力、探求心、好奇心には感服するばかりです。

時あたかもノーベル医学生理学賞に本庶先生が受賞されました。本庶先生は既存に甘んずることなく絶えず好奇心を持ち、勇気をもって挑戦する心を語られました。まさしくそれは岡部陽二氏の生き方そのままと重なりまして、私の心を熱く震わせました。

ことに嫌なことに背を向けず、何事にも邁進されることに教えられます。

船酔いを解消するため京大ヨット部に入部され、配属の部署に面白さを感じられないときは、英語検定に挑戦、日米会話学院へ留学の道を自ら切り拓かれるなど、枚挙にいとまありません。

中でも若くして、住友銀行七十五周年記念の懸賞論文に最高賞受賞。これは規制に対する挑戦であり、住友銀行の国際化はここに始まり、いよいよ岡部氏の活躍のスタートが切られたのでした。

鉱物採集、ゴルフ、囲碁、真向法、水泳、切手収集など、超人的趣味の多彩には絶句です。仕事一途に自分を追いやらず、心を遊ばせるという英智あればこそ。

自分史にひらく一輪梅の花 陽二

あとがきの一句に心打たれつつ、陰になり日向になり岡部氏を支えてこられた賢明なるご令室のすばらしさを思うばかりです。

自由な風に乗せて「国際金融人・岡部陽二の軌跡 好奇心に生きる」に寄せて
後藤みらい、2018年11月28日

著者である岡部陽二は私にとって、私の母の父に当たる関係であるが、本書の中で私の母、「明子」についての言及がほとんどなされていないことに違和を感じた。なぜなら、祖父の三人の子供の中で、母が祖父の特質を最も濃く受け継ぎ、外見も性格も祖父の生き写しだからである。飛行機をタクシーのように乗り回し、比類ない行動力と交渉力で、人脈の網を無限に張りめぐらす様は、母へと紛れもなく受け継がれている。

私の目から見ると、祖父や母は「国際人」というより、国境を感じさせない、国という概念すら超えていく「超国際人」であると思う。彼らは、常に新しいものを探し求めている、合理的な理由さえあれば、古い考えは即座に捨て去り、まるで過去のしがらみなどなかったかのように頭を切り替えられる。それは生き急いでいるようにも見えるが、それが彼らのマイペースなのである。頭の回転と切り替えの速さが生きるテンポに反映されているのだと思う。

祖父からはいつも新しい風が吹いていた。祖父の息子である徹がレアメタルのセミナーにて、「通常ならば、研究者という職種は家族の中で孤立しがちであるが、我が家ではなぜか孤立しない。その理由は父にある。」と言っており、私もそれに同意する。祖父は自分と他者、または、他者同士を比較しない。自分に対しても人に対しても自由な人であった。私は本書を読むまで、祖父の金融人としての側面を深くは知らず、祖父の中に研究者としての姿を見ていた。研究者とは好きなことに忠実で情熱を燃やし続けられる人でなければならないと思う。しかし、そのような情熱は時に周りとの摩擦や不理解を生む。祖父は好奇心の赴くままにどのような分野のことであっても、たとえ言語が違って、知識を収集する知識欲の権化のような人である。だから、むしろ、徹が研究者になることを喜んでいただろう。

私は学生時代、尊敬する人物について書く機会があり、祖父を選んだ。私は祖父を、国際的金融人だから選んだわけでもなく、大学の教授だったから選んだわけでもない。その時、私は、「ダディ(岡部陽二)が人の悪口を言ったところ見たことあらへん。それってすごいことやんな。」と祖母が言っていたことを思い出し、その一点において尊敬できると思い選んだ。祖父も母も、周りの人の対抗意識を刺激したり、周りをあまりに気にしない為に誤解されたりすること多いが、彼らの内実は我が道を行っているだけなのである。彼らの表の顔をひっくり返して、裏の顔を見ようとしても、表と同じ顔があるだけで、周りは困惑するのである。

私は、祖父の生きた時代が特別に激動した時代だったとは言いたくない。祖父はたとえ、今、生まれたとしても100年後に生まれたとしてもその時に必要なことを最も合理的な方法で成し、激動の人生を選んだだろうから。本書には一貫して、たとえ、困難に遭遇したとしても、その状況を楽しむ前向きな姿勢が描かれていた。それはこの世で最も価値があり、かつ、教えることが困難な「生きる力」なのだと私は思う。厳しい状況下でも、チャンスと捉え、アンテナを張り巡らし少しでも前進する術を見出そうする姿勢には、世代を超えて闘志の炎を貰えた気がした。

祖父は終活の一環で本書の制作を始めたと言っていたが、本書の出版を機にますます元気になっているように私には感じられる。そんな祖父の今後の活躍に期待したいと思う。

波乱万丈 痛快なバンカー人生

住友銀行の後輩、2018年10月25日

国際金融人 岡部陽二の軌跡（日経新聞出版社 2018年）を読みました。元銀行員の書いた「自分史」など退屈な本に決まっていると思われがちですが、本書は、波乱万丈、実に痛快な読み物です。

まず驚くのは、満州難民生活のくだりです。終戦とともに、父親はシベリヤに抑留され11歳の岡部少年は、満州の街角に立って、片言の中国語で餅売りをして、残された家族の生活をささえます。夜は、不衛生な着た切りシャツに繁殖する虱を、両手の爪で潰して行く毎日です。こんな逞しい少年時代の生活が、後年の物に動じない強靱な国際金融人岡部陽二の骨格を作ったのでしょう。

岡部氏が入行した住友銀行は、堀田庄三頭取の下、厳しい経営と実力本位の人材登用で知られていました。そんな企業風土がぴったり合っていたのでしょう。将に水を得た魚のような勢いで、難関を次々に突破して行きます。住友銀行国際部門を担って、当時、国際金融の後進国だった我が国が、世界のマーケットに食い込んでいく尖兵としての活躍ぶりが見事に描かれています。

そして、1980年代には、世界のトップバンクとして、「AAA」のレーティングを獲得した住友銀行の欧州統括専務取締役（ロンドン駐在）として、縦横の活躍をする岡部氏の姿は、我々後輩のあこがれの的でした。

そんな日本と住友銀行の栄光の日々をなつかしく思い出させてくれる名著です。

行動派国際金融人岡部陽二の成功の秘訣は何か 塩山三郎、2018 年 10 月 22 日

実に痛快な本である。一気に読了し、爽快な気分を味わった。本著は国際金融人岡部陽二の「自分史」であり、岡部家の「ファミリー・ヒストリー」でもある。「学問一筋で融通の利かない真面目一徹」の父と「明るく全て前向き」な母の第一子として誕生。長男乍ら、”The son of the sun” たるべしと「陽二」と命名。

両親の期待の大きさが伺える。父の満州国建国大学教授時代から、著者の記憶の基く自分史が始まる。満州から内地への引き揚げは、正に難民状況、波乱万丈だった。家族全員で力を合わせこの苦難を乗り越えた経緯が極めてリアルに語られ、レアな体験だけに読み応えのある部分だ。帰国後、著者は京都で両親に見守られ順調に成長する。学業、結婚、会社人生、家庭生活、転職、趣味、健康等あらゆる面で人も羨むような人生を見事に編み上げる。読後には、元気と勇気、知恵と知識とを授けられたような心地よい充実感に浸ることができた。

同じ金融界に身を置いた私にとっては、著者の国際金融活動の部分が最も心に強く響いた。40 年もの長きに亘り、著者は世界各国を欣喜雀躍として飛び回る「成功譚」は正に圧巻だ。行動派バンカーの面目躍如である。なぜ、このような見事な成果を挙げ続けることができたのか。著者は、「日に三度、自らを顧みよ。不作為・不親切・不勉強の罪を犯さざるや」をモットーとし、拳拳服膺し身を処してきたという。やるべきことを明日に延ばさず、接する人すべてに最大限の親切さをもって対応し、相手の正しい理解と事の本質の把握のための勉強を怠らない、これが著者の行動哲学と理解した。これを実践すれば、接する人すべてから信頼、尊敬、敬愛を得、岡部ファンは増え続ける。ビジネスがうまく回転するのは当然と納得した次第。

敢えて欲をいえば、次の 2 点が気になった。一つは、日経新聞の「私の履歴書」のスタイルを意識し過ぎたのか、若干紙幅を制限した嫌いがあるのでは。この制約を取り払い、もっと自由に筆を走らせたなら、国際金融活動などもっともっと「成功の秘訣」が具体的に伝えられたのではないか。二つ目は、自分史は本来的に「陽」の面ばかりに日が当たり、「陰」が隠れやすいという宿命を背負う。しかし、成功者にも失敗例は事欠かない筈。数少ないかも知れないが、国際金融活動での失敗例についての記述なども加われば、「成果」が一段と光り輝いたのではないか。尤も、「陽」二の自分史だけに陽が強調されるのは避け難かったのかも知れない。いずれにしても、極めて質の高い「私の履歴書」である。是非、ご一読をお薦めしたい。

2、書評「国際金融人・岡部陽二の軌跡～好奇心に生きる」

2018 年 12 月 1 日発行「国際金融」1315 号、p47 所収

私が岡部さんを知ったのは住友銀行の伊藤忠担当となられた 1968 年である。二人はそれぞれの職場で第二次大戦後の世界経済発展を支えたブレトンウッズ体制を崩壊させたニクソン・ショックと苦闘した。企業は為替リスク回避に奔走し、銀行はその対応に追われた。職場は[眠る間もない殺人的な忙しさであったが、働き甲斐があった]。変動相場制への移行とともに国際通貨情勢は不安定化し、1985 年のプラザ合意と経済のグローバル化を経て、トランプ政権の貿易戦争へと続く。

岡部さんは、そして私も、日本の金融行政の不条理に悩まされ続けた。1980 年代の日本は世界一の黒字国でありながら、時代遅れの為替管理と資本規制を 1998 年のビッグバンまで維持して、民間の経済活動を妨げた。岡部さんは、事前許可制から届け出制となった取引も「届出を受理しないという行政措置」の妨害に驚いた。東京金融市場の国際化の遅れは当然の帰結である。今も日本企業は海外の資金集中管理拠点を東京ではなく、シンガポールなどに置いている。

岡部さんはロンドンでイングランド銀行を説得して変動利付 C D を発行した。また、ゴットルド銀行の社外取締役を務めた時には、スイスの会社法が日本の商法と驚くほど似通っているにもかかわらず、両国のコーポレートガバナンスに大きな違いかおるのは、法運用のあり方に由来すると実感した。商法改正にも拘らず企業の不祥事が絶えない日本企業のコーポレートガバナンスを考える上で、経営者や企業のテクノクラートにヒントを与える話である。

岡部さんは 1993 年まで住友銀行の国際金融業務の中心を歩んだ。本書は銀行の現場から見た第二次大戦後の国際金融史であり、現在の国際金融情勢へと続く。読者は岡部さんの体験から学術書では得られない実感に触れることができる。今後の国際金融情勢を理解する際に役立つだろう。

私が岡部さんのご縁で阪南大学流通学部で、岡部さんが私の縁で広島国際大学医療福祉学部で教職についた経緯は本書に詳しい。明光証券会長であった岡部さんは新たな挑戦を選択した。アメリカの病院経営の実態を調査し、専門書を翻訳出版するなど、瞬く間に医療問題の専門家となり、医療経済研究機構専務理事を務めた。教育面では、私も経験したことであるが、日本の大学は微温的な世界で、「優れた教育者であろうとする教授が少ない」ことに驚き、ゼミやインターンシップで学生が自ら考えて行動する力と社会常識を身につけるように指導した。

本書の副題が示す通り、岡部さんは「好奇心に生きる」人である。不思議な自然景観や文化遺産を各大陸の果てまで求めた。岡部さんの自宅ガレージに車

はなく、各地で収集した鉱物で溢れていた。私は、岡部さんの勧めで南ドイツのオーバーアマガウで10年毎に演じられるキリスト受難劇を訪れようとしたが、チケットを人手できなかつた。岡部さんの好奇心と行動力は留まるところがなく、平均的日本人の何人分かの人生を生きた。本書はその自分史である。
(評者 石田 護 伊藤忠商事理事)

3、毎日新聞夕刊「人・摸・様」「元銀行マン、充実の自分史」2018年11月15日



4、自分史刊行に対し授与された「東証ペンクラブ文化賞」2018年11月5日

